

1994年12月15日第三種郵便物認可
2016年11月15日発行(年6回 寄附月15日発行)
第29巻4号(通巻第245号)

ケアの情報とその深部へ

Bricolage



2016年
冬号(12・1月)
Vol.245

500円+税

特集

宅老所

はこみち

地域に 目比ざる



新・地下水脈
時代遅れの誇り 11
自己肯定感が
もてない

日本人はその大多数が特定の宗教をもたないことで知られている。しかし、そんな日本人の大多数が信じている宗教が一つある。それは「科学」だ。

今年の4月、脳科学者の池谷裕二氏がこのようなツイートを上げていた。

小学校にあがる前に母親が丁寧な面倒をみて育てた幼児は、海馬のサイズがそうでない子の2倍以上よく成長し、思春期になつた後も自分の感情をうまくコントロールできる人に成長したそうです。今朝の『PNAS』誌より。↓[google/doi/10.1073/pnas.1611111137](https://doi.org/10.1073/pnas.1611111137) (小学生では手遅れなのだとか)

ツイート数は788件、いいね (Like) は1185件。このツイートがまたたくまに拡散されたことがわかる。私のフェイスブックでもシェアされており、母親当業者を中心とした多くの人からのコメントが寄せられていた。

このツイートへの大多数の反応は、このツイートを科学的事実とし、それに対してコメントを述べるものであったが、これをみるやいなや私の頭には次のいくつかの疑問が浮かんだ。

- ① 研究の対象者は何人で、それはどこの誰か？
- ② なぜ母親なのか？ 父親ではダメなのか？
- ③ 母親が丁寧な育てているかどうかをどうやって測るのか？ 逆に母親が丁寧な育ててない

「育て方」ではなく、「サポートの仕方」である。実際、論文内では、「育てる」に当たる *nurture* や *raise* ではなく、*support* が使われている。つまり *maternal support* を「母親の養育」という形に池谷氏が翻訳したのである。

次に測定方法である。調査では、学校に上がる前の子どもに対する母親の関わり方が、学校に入ってからの子どもの関わり方より海馬の成長に影響を与えると結論づけられている。果たしてこれはどのように調査されたのか。

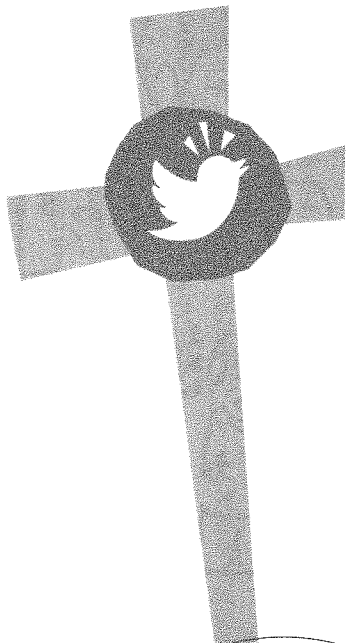
まず就学前の子どもに対する関わりは、ラッピンクされたプレゼントを子どもの前に置き、母親がそれを8分間開けないように我慢させるという課題により、一方、就学後の子どもへの



世界の本質は猫のほうにわかっている。きつと

Photograph: Maho ISONO

『科学という宗教』



世界から見る
6
磯野真穂
Maho ISONO

ことはどうやってわかるのか？

科学的な研究の成果にしてはあまりにも結論が大胆すぎる。実際の論文を読んでみると、次のようなことが判明した。

① 研究の対象者▼127名の児童、平均年齢は10・27歳。定期的に脳スキャンを受けることに同意した児童であり、その開始年齢は3歳〜5歳からである。国籍は不明であるが、ワシントン大学の倫理委員会を通過しているため、全員アメリカ人と思われる。

つまりこの研究結果は、127名のアメリカ人児童に対するものである。育てられ方も価値観も違う日本の児童にどこまで適応できるのか？

- ② なぜ母親なのか？▼この調査は数々のげっ歯類に対して行われた実験の成果がもとになっている。幼い頃強いストレス下に置かれず、十分なケアを与えられた赤ちゃんネズミの海

サポートは、パズル作成により評価されている。子どもは1つのパズルを作成するよう言われるが、パズルを目で見て確認することはできない。したがって子どもは、前にいる母親の助けを借りながらパズルを完成させる。調査員は、それぞれの課題で母親がどのようなサポートを子どもにするかを観察し、望ましいサポートに対して特典を与える。

つまりこの調査で観察されているのは、日々の子育ての仕方ではない。「母親が丁寧に面倒をみて育てた幼児」というフレーズから、誰が「プレゼントを前にした子どもへの関わり」あるいは「子どもがパズルを解く際の母親の助け方」を想像するだろうか？ これら課題の得点が高いことをもって「子どもを丁寧に育てている」と結論付けるのは論理の飛躍がすぎることではないか。

この研究をどう読むかは読者次第である。しかし少なくともこの研究から、池谷氏がツイートしたような大胆な結論は導きにくい。この研究からいえるのは、対象となった127名の児童において、パズル作成をうまくサポートできる養育者の子どもは海馬のサイズがそうでない子より大きく、またそのような子どもは思春期後、感情コントロールがうまくいく傾向があったということだけである。

推測であるが、おそらく池谷氏は論文そのものを読まず、抄録と呼ばれる論文の要約のみを読んでこのツイートをしたのである。しかしこ

馬は成長がそうでないネズミより良好といういくつかの研究の成果だ。そしてこの研究は、これを人間にも応用してみようというわけである。

ここで1つ注目したいのは、げっ歯類の調査の紹介では *caregiver* という性別を判定できない言葉が使われている一方で、この結果を人間に応用するという段階になると、この言葉が *maternal* (母の) というジェンダーを帯びた言葉に変換されていることである。つまりこの結果は、父親と母親の養育成果を比較した得られた研究ではない。しかし、池谷氏のツイートだけを見れば、母親であることが重要と思う人がいても不思議はない。

③ 「丁寧に育てているかどうか」の判定基準▼まず引っかけたのは翻訳である。論文を読むと、この実験で測定されているのは、

のツイートへの反応を見ると、その内容を疑うことなく、「やっぱり小さい頃の母親の養育は大事。それは科学的にも証明された」と納得している読者が大多数であることがわかる。東大の脳科学者がツイートした科学的研究の成果ということ、皆が彼の言葉を鵜呑みにしたのだ。

私たち日本人は、信仰をもつ人々をいかにわしい目で見ることがしばしばある。しかし池谷氏の言葉を鵜呑みにした人々と、「あの教祖が言ってるんだから真実に違いない」という信者はいったい何が違うのだろうか？

科学とは真実を証明する試みではない。それは疑い、検証し、反証し続ける試みである。「科学」という言葉が氾濫する今だからこそ、科学的な試みの本質を忘れずにいたい。



磯野真穂 (いそのまほ)

国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究所講師。早稲田大学人間科学部にて運動生理学を学んだと渡米。渡米先のオレゴン州立大学にて専攻をスポーツ科学から文化人類学に変更し、文化人類学者を志す。摂食障害や、医師―患者関係、高齢者医療など、身体と心にまつわるトピックをフィールドとし活動を続けている。著書に『なぜふつうに食べられないのか―拒食と過食の文化人類学―』(春秋社/2500円+税)

著者 URL : <http://www.anthropology.sakurane.jp/>

現代ビジネス (<http://gendaiismedia.jp/articles/-/49908>) に、糖質制限ブームについて磯野さんが書いています。

i Luby, Et al. (2016) Preschool is a sensitive period for the influence of maternal support on the trajectory of hippocampal development. PNAS Early Edition:1-6 (<http://www.pnas.org/content/113/20/5742.short>)

ii 私の知る数々の信仰をもつ人々も、同じことをしていると思う。誰かの言うことを鵜呑みにするのではなく、自身の信仰について問いかけ、考え続ける姿勢は、科学者のそれと同じであると思うときがよくある。